

幼稚園・保育所の特別支援教育コーディネーター養成研修 —横須賀市発達支援コーディネーター研修3年間の成果—

久保山 茂樹
(企画部)

要旨：本稿では横須賀市が実施した発達支援コーディネーター研修を概観し、その成果について報告した。発達支援コーディネーターは、横須賀市が独自に設定した幼児期の特別支援教育コーディネーターであり、幼稚園に加え保育所も対象とし、公立・私立を問わないものである。受講者は、横須賀市内で障害のある子どもにかかわる全ての担当課や教育委員会及び療育相談センターの職員の説明を通してそれぞれの業務内容を知り、保護者から子育て体験談を聞き、障害のある子どもへの接し方について障害疑似体験を通して学び、発達障害の専門医や特別支援教育の研究者から専門知識を得た。また、グループ協議を通して各園の課題を共有し解決法を学んだ。終了後アンケートでは、全ての受講者が発達支援コーディネーターの役割のイメージができたと回答した。

見出し語：特別支援教育コーディネーター、幼稚園、保育所、連携

I. はじめに

地域における早期から一貫した支援の実現は、特別支援教育の重要な課題である。小・中学校においては特別支援教育の体制整備の充実が図られてきた。しかし、幼児期を見ると、幼稚園の体制整備について「小・中学校に比べ、幼稚園・高等学校は依然として体制整備に遅れが見られる」(文部科学省, 2012a) など遅れが指摘され続けている。特に特別支援教育コーディネーターについては、指名率が幼稚園全体で59.1%と他の校種に比べて著しく低く、私立幼稚園では39.9% (文部科学省, 2012a) である。また、保育所については、保育所保育指針において市町村や関係機関との連携に努めるよう示されているが、そのための人材の指名や養成の在り方については特段の指摘がない。

幼児期は、幼稚園、保育所、認定こども園など異なる形態の施設があり、それぞれに公立と私立があるなど、多様な教育・保育の形態がある。平成24年度に小学校に入学した児童の幼稚園への就園率は55.1%であり、平成24年度に私立幼稚園に在園している5歳児は77.6%であった(文部科学省, 2012b)。このように、小・中学校は公立学校が大多数であるが、幼児期を見ると幼稚園に在籍する子どもは半分

強程度であり、公立幼稚園に在籍する子どもは更にその4分の1に過ぎない。したがって、幼児期の支援体制の充実を図るためには、幼稚園か保育所という施設の差や、公立か私立かという設置主体の差を超えた取組が不可欠になる。

横須賀市の場合、市立幼稚園が2、私立幼稚園が37、市立保育所が11、私立保育所が51という設置状況であり、私立の幼稚園・保育所の割合が高い。地域における一貫した支援の実現という観点からは、幼稚園・保育所と行政や関係機関との連携を特に進めていく必要があると考えられる。

このような状況の中、横須賀市こども育成部こども青少年支援課は、平成21年度から平成23年度まで「横須賀市発達支援コーディネーター研修」を実施した。この研修は横須賀市の全幼稚園・保育所を対象にしているが、特に私立幼稚園や保育所をも対象にしている点で、他都市には見られないものであり、私立の幼稚園・保育所の割合が高い同市において重要な取組であると考えられる。

筆者は、横須賀市と本研究との共同研究の一環として、「横須賀市発達支援コーディネーター研修」にスーパーバイザーとして参画した。本稿ではこの研修の概要を報告し、その成果について考察する。

Ⅱ. 発達支援コーディネーターの研修内容

1. 概要

「横須賀市発達支援コーディネーター研修」は、平成21年度から平成23年度まで3年間、各5日間の日程で実施された。また、平成22年度から平成24年度には、前年度の研修受講者を対象とした「発達支援コーディネーターフォローアップ研修」が各4日間の日程で実施された。

平成22年度からは、横須賀市教育委員会が、発達支援コーディネーター研修修了者と小・中学校の特別支援教育コーディネーターとの合同研修会である「育ちと支援をつなぐ研修会」を実施している。

2. 横須賀市発達支援コーディネーター研修

こども青少年支援課によれば、発達支援コーディネーター研修の目的は、以下の3点であった。

- ・発達障害のある子どもへの専門的な支援を通し、園で増えていると言われている落ち着きがない、友達とうまく遊べないなど「気になる」子どもたちへの働きかけかかわり方等について学ぶ。
- ・地域の中で子どもやその保護者を支援していくためには何が必要なのかを、当事者の話や関係機関との連携等を通して考える。
- ・園と地域の関係機関とが連携を取りながら支援していけるよう、横須賀市内にある障害児を支援している各機関の機能や役割を学び、ネットワークの構築を目指す。

表1 横須賀市発達支援コーディネーター研修プログラム（平成23年度）

	内 容	講 師
第1日目	発達障害児を取り巻く横須賀市の現状と取り組み①	横須賀市職員（こども青少年支援課・児童相談所・こども健康課・障害福祉課）
第2日目	発達障害児を取り巻く横須賀市の現状と取り組み②	横須賀市教育委員会支援教育課指導主事
	障害児を持つ親の体験談	横須賀地区自閉症児・者親の会会長
	発達の遅れと発達障害を理解する	横須賀市療育相談センター所長（医師）
第3日目	障害児者を理解する	知的障害者地域支援ネットワーク地域キャラバン隊
	支援の具体を考える①	特別支援教育研究者（筆者）
第4日目	支援の具体を考える②	横須賀市療育相談センター職員（臨床心理士・言語聴覚士・作業療法士・ソーシャルワーカー）
	発達障害児を取り巻く横須賀市の現状と取り組み③	
第5日目	発達支援コーディネーターに期待する役割 地域支援のあり方 個人情報の考え方	横須賀市職員（こども青少年支援課）
	振り返りグループワーク	特別支援教育研究者（筆者）

表2 横須賀市発達支援コーディネーターフォローアップ研修プログラム（平成23年度）

	内 容	講 師
第1日目	グループワーク①（コーディネーターとしての取り組み、園での実践、新たな課題等について）	横須賀市職員（こども青少年支援課）
	就学支援・相談支援チームについて	横須賀市教育委員会支援教育課指導主事 横須賀市立小学校教諭
第2日目	横須賀市療育相談センターの現状と取り組み①	横須賀市療育相談センター園長他 横須賀市職員（こども青少年支援課）
第3日目	グループワーク②（実習の振り返り等）	
第4日目	グループワーク③（各園での事例に関する協議）	横須賀市職員（こども青少年支援課） 特別支援教育研究者（筆者）

平成21年度は8月21日から12月22日まで、平成22年度は9月30日から11月26日まで、平成23年度は9月30日から11月24日までの期間中に5日間、それぞれ半日のプログラムで実施された。受講者には全日程参加を原則とした。平成23年度のプログラムは、表1に示したとおりである。

実施にあたっては、コーディネーターに関する研修が保育者にとって経験のないものであることを考慮し、担当者は以下のような配慮をした。これは、担当者や講師と受講者、また、受講者同士の連携を促進することとなった。

- ・あたたかな雰囲気作り：リラックスできるBGMを流し、ユーモアを大切にしながら進行、柔らかな言動に留意した。
- ・親しみやすいアイテム：本研修のロゴマーク、ロゴマーク入りの名札、研修冊子等、全て担当者が手作りで作成した。
- ・研修の価値付けと仲間意識：修了者には修了証と認定証（写真入り）を授与し、研修終了後に実際に連携する際やフォローアップ研修で活用した。

平成22年度からは、前年度の発達支援コーディネーター研修受講者を対象に、3日間の日程でフォローアップ研修が実施された。平成23年度のプログラムを表2に示した。

3. 育ちと支援をつなぐ研修会

発達支援コーディネーター研修受講者と小・中学校の特別支援教育コーディネーターの合同の研修会として、平成22年度から、横須賀市教育委員会が主催して実施中である。内容は、表3に示すとおりである。

表3 育ちと支援をつなぐ研修会

第1回「支援をつなぐために」

- 参加者：発達支援コーディネーターと小学校の特別支援教育コーディネーター
- 内容：グループワーク（自己紹介、支援シートを活用した卒園・入学までの取組について等、各園や学校の取組の紹介）と協議内容の共有（各グループからの発表と筆者によるコメント）

第2回「育ちと支援をつなぐ～就学前教育との連携」

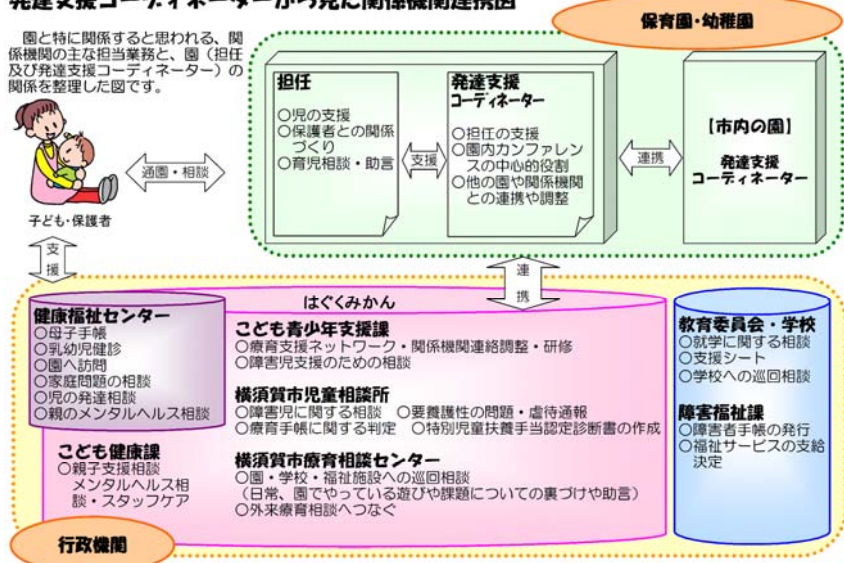
- 参加者：発達支援コーディネーターと小・中・高・特別支援学校特別支援教育コーディネーター
- 内容：講演「支援をつなぐ中で、私たちにできること、知っておくこと」（筆者）

第3回「コーディネーターとしての役割を考えるー保育所・小学校の取り組み事例よりー」

- 参加者：発達支援コーディネーターと小学校の特別支援教育コーディネーター
- 内容：保育所・小学校の事例報告と協議

発達支援コーディネーターから見た関係機関連携図

平成21年度 発達支援コーディネーター研修 資料



III. 本研修で受講者が学ぶ連携

発達支援コーディネーターに求められる役割として重要なのは「つなぐ」役割である。横須賀市内では、幼児期に、図1に示すようなつながりが想定されている。この研修では、受講者が「つなぐ」役割の重要性に気づき、所属の幼稚園・保育所でその役割を果たせるように、図1に示された様々な人的資源との「つながり」を体験ができるようにしている。以下にその概要を示す。

図1 横須賀市発達支援コーディネーターに期待される連携

1. 幼稚園や保育所内で職員が連携するために

本研修では、グループワークの機会が多く設定されている。その目的として、受講者が持つ保育上の課題の解決があった。しかし、同時に、ケース会議の進行やまとめ方の体験も重要な目的であった。そのため、受講者が交替で司会、記録、全体への発表の役割を務めることにし、園内でのケース会議や園内委員会を効果的に運営することができるようにした。

このグループワークの活性化と効率化の観点から、子ども青少年支援課は、[図2](#)に示すワークシートを作成し、研修で使用した。

このワークシートを使用したケース会議が目指すものは、子どもへのまなざしの多角化と支援内容の多様化、所要時間の縮小による参加者の負担感の軽減であった。そして、会議後には「とりあえず明日、何をするか」を明確にできるようにした。

保育現場では、特別な支援が必要な子どもが多数在籍する一方、会議時間の設定が困難である。受講者は、所属の幼稚園・保育所でこのワークシートを活用し、短時間で必要な協議できることを実感していた。また、グループワークの経験は、コーディネーター同士のつながりを作ることにもなった。

2. 行政や他機関と連携するために

この研修では、横須賀市で幼児にかかわる全ての担当課（児童相談所を含む）や療育相談センターから、職員が講師として参加した。受講者は、各担当課の業務内容を担当者から具体的に知ることができ、幼稚園・保育所で課題が生じた時はどの課とつながれば良いのかを知ることができた。同時に、担当課の職員の顔を知ることや直接話すことによって、必要な時に「あの人がいる課」とつながるといったイメージができたと考える。

フォローアップ研修時は、療育相談センターの療育部門において実習を行った。受講者は、専門的な療育を直接知ることができたと同時に療育相談センター職員とのつながりが深まった。

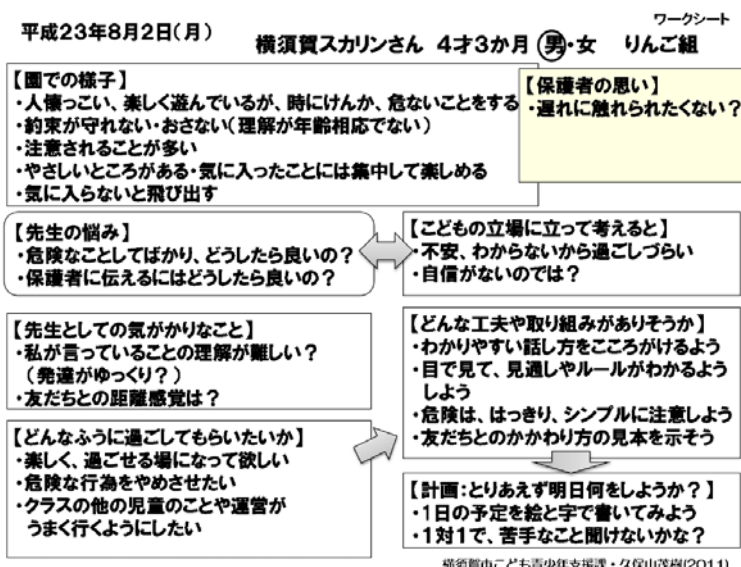


図2 研修で使用したケース会議のワークシート

3. 保護者と連携するために

障害のある子どもへの一貫した支援を実現する際に、保護者とのつながりは必須である。本研修では、保護者の講義と保護者による障害理解のための講演が組み込まれている。講義では、成人し就労している息子を持つ母親が講師となり、息子の成長を振り返りながら、幼児期に求められるかかわりについて話があった。講演は、地域キャラバン隊という保護者の会が[表4](#)に示す内容で実施した。

表4 横須賀市地域キャラバン隊による講演内容

1. 自閉症、ダウン症の障害特性と接し方
2. 体験コーナー
 - 言葉がわからないってどういうこと？
 - ・「パピブペポの国」へようこそ
 - どうしてうまくできないの？（写真1）
 - ・軍手をはめてボタンかけや折り紙
3. 接し方のコツ
 - こんな時どうするの？
4. 詩の朗読
 - 「僕たちの世界」
 - ・障害のある子どもの日常生活や趣味等について
 - 詩と写真で紹介



写真1 障害の疑似体験

(軍手をしてボタンをはめる受講者と、急かせる声かけをするキャラバン隊のメンバー)

受講者は、我が子の障害や生活について理解を促すために自ら語る保護者に接し、感銘を受けると共に、保護者とのつながり方について再考した。

4. 小学校特別支援教育コーディネーターとの連携

発達支援コーディネーター研修修了者は、教育委員会の主催による、小学校等の特別支援教育コーディネーターと合同の研修も受講した。

平成22年度は、その第1回目であった。目的の第一は幼稚園・保育所と小学校が交流しコーディネーター同士が顔見知りになることであり、グループワークによってその目的は達成された。同時に、就学が間近い時期での開催であったためか、幼稚園幼児指導要録や保育所児童保育要録、就学支援シートの小学校での扱いについて議論を深めた。この研修が幼稚園・保育所と小学校のコーディネーターがつながる機会となり、以後の交流のきっかけとなった。

5. 研修担当者や受講者と研究者との連携

本研修には企画、実施、終了後評価の各段階において、特別支援教育の研究者である筆者が参画した。

こども青少年支援課の職員は専門職としての知識や豊富な実務経験を持つ者たちであり、同課の職員だけでも研修を運営することができる資質を持っていた。そこに、筆者が特別支援教育の研究者として、地方自治体における特別支援教育体制整備の特色あ

る取組や発達障害のある子どもに対する教育の最新の動向等について全国的な情報を提供することにより、受講者や担当者の知見を幅のあるものにすることができたと考える。また、研究者が研修に常に参加していることで、受講者から質問があった際に速やかに解決することができた。

IV. 研修の効果

本研修が受講者にとってどのような効果があったのかを、こども青少年支援課が実施した平成23年度の受講者へのアンケート結果から検討する。平成23年度の受講者は26名で、内訳は幼稚園が4名、保育所から19名、その他3名であった。経験年数は、5年未満が3名、6年から10年が5名、11年から15年が3名、16年から20年が9名、21年から25年が3名、25年以上が1名、無記入が2名であった。

1. 研修の活用について

研修で学んだことを現場で活かそうかという問いに対して、回答は、「ぜひ活用したい」77%、「活用したい」23%であり、「活用できるかもしれない」、「活用できなさそう」には回答が無かった。このことから、本研修の内容は受講者のニーズに合致し、教育・保育現場で活用できるものであると考えられた。

2. 各担当課・機関の業務の理解や連携について

こども健康課（乳幼児健診等担当）との連携については、「連携したいと思う」59%、「機会があれば」37%、「無記入」4%であった。また、療育相談センターの巡回相談については、「来てもらいたい」59%、「機会があれば」41%であった。教育委員会の就学相談の流れの理解については、「よくわかった」41%、「だいたいわかった」55%、「無記入」4%であった。以上の回答から、各機関の役割が理解され連携の重要性への認知度が高まったと考えられた。

3. 保護者との関係について

保護者のニーズの理解について、イメージすることができたかという問いに対して、「はい」48%、「おおよそできる」45%であり、「無記入」の7%（2名）

を除いて多くの受講者がイメージすることができたと考えられた。

保護者とのコミュニケーションにおいてヒントになることがあったかという問いに対して、「はい」86%で「いいえ」と答えた者はなく、無記入が14%（4名）であった。保護者が講師として直接語ることによって受講者にヒントが伝わりやすかったと考えられた。

4. コーディネーターの役割等について

支援に対する意識について、5日間の研修に参加して、最初に比べ支援に対する意識に変化があったかという問いに対し、「前向きになった」65%、「少し前向きになった」27%、「無記入」8%という結果であった。ほとんどの受講者が本研修によって支援をすることへの意識が向上したと考えられた。

コーディネーターの役割をイメージできたかという問いに対する回答について研修第1日目と第5日目（最終日）とを比較したのが図3である。第1日目には「まあまあできた」の回答が「できた」よりも多かったが、最終日である第5日目には「できた」の方が多結果となった。5日間の研修によって発達支援コーディネーターの役割のイメージができたと考えられる。しかし、「まあまあできた」の回答をした受講者がなお4割以上いることから、実際に発達支援コーディネーターとしての経験を積まなければ、「できた」と確信できないとも考えられた。

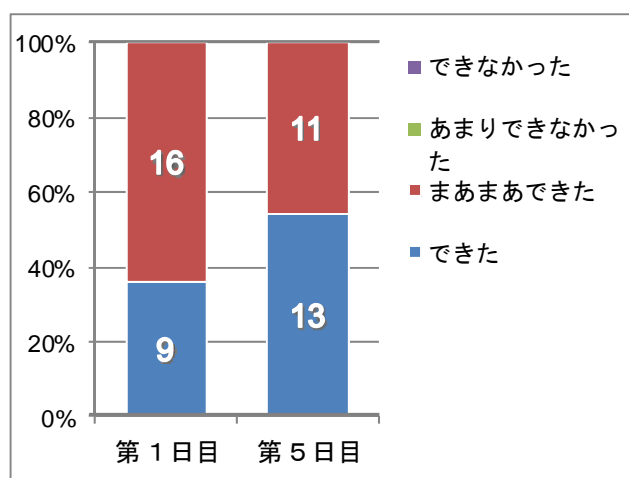


図3 アンケート結果の変化（「コーディネーターの役割のイメージができたか？」）

V. おわりに

本稿では、横須賀市が平成21年度から実施した「発達支援コーディネーター研修」の概要を紹介し、幼稚園・保育所と地域の人的資源をつなぎ活用できる人材の育成の観点で考察した。本研修で、受講者は地域の資源との様々につながりを経験することができた。アンケート結果を見ると受講者はこれらの体験からつながることに対して肯定的な感想を持つようになった。横須賀市は私立幼稚園・保育所の割合が高く、各園がそれぞれ建学の精神や社会福祉法人として設立理念等に基づいた独自の運営を行っている。しかし、地域で一貫した支援を行うためには、各園の独自性を活かしながらも、つながりを強化する必要がある。この研修によってつなぐ人材が育成されたことにより、幼稚園・保育所が市内の様々な機関とつながる機会が増えると思われるが、現時点では検証することができない。今後、小学校とのつながりも含め、発達支援コーディネーターの活動が横須賀市の支援体制の整備にどのように寄与したのかを明らかにする必要がある。

引用文献

文部科学省 (2012a). 平成23年度特別支援教育に関する調査の結果について（通知）。

文部科学省 (2012b). 平成24年度学校基本調査速報。

謝辞

本稿は、横須賀市と本研究所との共同研究の成果の一部であり、共同研究の一環として筆者が参画した横須賀市発達支援コーディネーター研修及び関連の研修について、筆者の責任で整理したものである。

本稿をまとめるにあたり、関係者の皆様に御礼申し上げます。特に横須賀市こども青少年支援課（実施当時の所属）の原田修二、高場利勝、中谷圭子、井上満、蝶野倫子、加藤智子、高橋秀和、粕谷郁美、岡田浩子の各氏からは多数の資料と助言をいただいた。感謝申し上げます。